六十一年四月、会社を定年退職して間もなく、好事魔多しの諺ではないが、糖尿と動脈硬化による脳血栓で倒れた。右手の麻痺と言語障害が後遺症として残りましたが、現在はこのリハビリと機能回復に努力し、県の高齢者通信大学を卒業し、リハビリを兼ねて民謡、吟詠、カラオケに没頭して、平和な日々を送っておられます。愛媛県支部会員としてご協力をいただいております。

（愛媛県　山本　繁夫）

望まなかったシベリア放浪記

愛媛県　金　枡　弘

はじめに

抑留中、同胞により、いわれのない事柄を誣告され、弁解弁護もかなわず戦犯という烙印を押され、ソ連戦時刑法とかで一方的に有罪判決を受け、獄中生活を強いられ、刑期を全うしたり、減刑された方はまだしも、獄死した方々、また抑留中の作業などで亡くなられ、永遠に日本の春を迎えることなく、凍土の下に眠り続けている戦友をしのびつつ、あなたたちの犠牲によって生還できた者の一人として、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の方々におかれては、さぞかし無念の日々が続いているものとご推察いたしております。復員後半世紀を無為に過ごし来たことを反省しながら、一個人としてはどうしようもない空しさを感じながら、スターリン時代のソ連と、民主国家の仲間入りをしようとしている現ロシアを比べ、猜疑心が強いことなど、余り変わらないと思っているのは私だけではないと思います。悪夢であったシベリアのことを私としては語り継ぎ、言い継いで行かなければならない義務を感じております。しかし、私たちがこのような不幸を味わった原因は、戦争という争いごとであったことを考えれば、絶対平和を守らなければならないと思います。二十一世紀を目前にして、語り部も年々少なくなっている今日、私としてこの機会を得たことは幸せと思っております。

ダモイの時、メモ類を全部処分したため、記憶のみを頼りにこの放浪記を草します。

私のプロフィール

大正十四（一九二五）年七月二十七日、愛媛県に生まれ育ち、愛媛県で余生を終わるであろうと思う私の今日までの人生で、やはり無念であったことは、足かけ三年間のシベリア生活です。人様から、捕虜になるため満州に行ったようだ、とよく言われましたが、正にそのとおりでした。

昭和二十（一九四五）年三月三日、旧満州東満総省東安の通信連隊（原隊は久留米電信第七連隊）に入隊したことが、シベリア生活を余儀なくさせる第一歩であったからです。

それまでの私は検事局の職員として、宇和島、松山で勤めていましたが、一年繰り上げの徴兵検査を昭和十九年に受け、第二乙種合格となりました。二乙の場合、数年前までは現役兵として入隊しなくともよかったようでしたが、昭和二十年に現役兵として入隊したのです。

これ以後終戦までのことについては、本年六月、松山市在住で同年兵と思われ、現在「愛媛シベリアを語る会」の役員の菊池記一氏からと、坂田一道氏からのお手紙と、それに対する私の返事を全文掲載いたします。

まず、菊池氏から私あて（原文のまま）

拝啓　桜の花が青葉に、そして初夏の候となりました。過日はシベリア抑留犠牲者の慰霊祭、総会等お世話になりました。さて突然ですが、別紙手紙の写を送付いたします。発信人は私達の同年兵で、現在は東宇和郡城川町の老人養護ホームで夫婦で療養生活をしている坂田一道氏からのものです。

手紙の文面を判読しますと、三～五行目は会員名簿で貴男のこと、六～十行あたりは東安時代を思い出していること、十行目以降は彼が帰国後に調べたようですが、もし貴男のご経歴がそのようであったかどうか、手紙の内容が断片的であっても、何だか一致する

ような気がしてなりません。

プライベートな問題でもあり、彼の思いを達成させるためにも事実の有無を知らせてやりたいと思い一報する次第です。よろしければ下記にお知らせ下さいますようお願い申し上げます。

敬具

次に、坂田一道氏から菊池記一氏あての手紙で、私にコピーを送ってもらったもの（原文のまま）

「愛媛シベリアを語る会」に左記の名がありました。「金枡弘」七十二才、松山市、独立混成一三一旅団、通信隊、司法書士、検察庁、主任捜査官、ハルビン（二十・十一月）コムソモリスク周辺（二十二・十一月）東安電信四十六連隊の通信講堂で通信試験を受けた折共に通り、名前を聞いた時「金枡」と言う姓で名は忘れました。その時に宇和島市の裁判所で書記の仕事をしていると聞いたので、若い年でえらいなあーと思っていました、現在電話帳で調べても宇和島市には「金枡」さんという姓は見当たりません、それで帰国後松山市に出られたか、身寄りのない方ではないかと思ったのです。（以下省略）

という内容で、このお二人の手紙に対する私の返事は、

会員名簿によるご経歴を見ればお二人とも入隊時の部隊は私と同じであったと思います。

昭和二十年二月末博多に集合、満州から宰領官荻野中尉引率のもと三月三日、東安の部隊（原隊久留米電信七連隊）で入隊式、雪がチラチラしていましたが、無線第一中隊に配属されました。（部隊長は尾崎大佐、奥さんが松山出身の方でした）

同年五月、有線隊が台湾防衛ということで内地へ帰り（当時は沖縄戦の真っただ中で台湾へ行けず、久留米で足止めのまま終戦）、私らの無線隊は約七〇〇人の小部隊となり、中支戦線帰りの少佐が部隊長となりました。

その後同年六月から七月にかけて部隊全員が牡丹江

へ移駐しました。完全軍装で約三〇〇キロを十一日間（途中一日、鶏寧で大休止）で走破したのですが、当時この大移動をロ号作戦と言っていたと思います。

牡丹江では小丘陵の半地下兵舎で、市街地が一望できる所でした。私は第一小隊に属し、小隊長は桔梗見習士官でした。

ここぐらいまでが、菊池さんや坂田さんらとご一緒でなかったかと思います。

その後私は、同年七月に在満日本人を大召集し、その部隊編成要員としてハルビンへ転属しました。青木という軍曹や東北出身の佐藤という兵長も一緒でした。

ハルビンでは新編成隊の独立混成一三一旅団（旅団長宇部四男少尉）の通信隊で、続々と入隊して来る在満日本人の編成作業中終戦、兵器などをハルビン競馬場に集積する作業などの使役後、海林、牡丹江へ逆送されたのですが、牡丹江の収容所は私がハルビンへ転属する前にいた部隊兵舎で、ここで何人かの戦友に会い、桔梗見習士官の第一小隊は抗戦のため三号乙無線機その他の武器を持って山の中へ移動し、その後行先不明であり、私のみ生還したものと勘違いされ、私はハルビンへ転属していた事実を話したものでした。その後二十年十一月、ソ連へ連行された者では終わりごろであったと思いますが、将校団で編成された大隊と一緒にソ連領へ、大隊長は参謀肩章をつけた高島少佐でしたが、その後何回かバラバラにされ、あちこちへ分かれてしまいました。

私の場合コムソモリスク周辺を転々とし、作業は、バム鉄道（多分支線であったと思います）の線路作業、石灰（カリエル）工場の燃料材伐採作業、石灰を一輪車（ターチカ）で貨車への積み込み等々でした。

最近山本会長から送られて来た名簿によれば、東安の同じ部隊であったと思われる方々（旧電信七連隊、電信四六連隊、一三九四八部隊）は十人位おられます。皆さんお元気であろうと思いますので、近い将来この方々と思い出話をしたいと思っております。できれば会のお世話をしていただいている菊池さんが音頭をとって下されば幸甚の至りです。

終わりに、まだまだ書き足らず、語り足らないことがらがたくさんありますが、思い出しながら、今回「体験者としての手記執筆」を依頼されておりますので、ここで書きたいと思います。この手紙は菊池さん、坂田さん、私との共通であろうと思われた部分のみ書き留めた次第です。

と私はお二人へご返事を差し上げました。このお二人とは、右ご返事の文中、牡丹江まではご一緒で、以後は別の世界での抑留生活をされたものと思います。

終戦、捕虜としてソ連に入るまで

昭和二十年七月、新編旅団編成要員としてハルビンへ転属。仮の旅団本部であったハルビン陸軍病院前の兵舎に入り、続々と入隊して来る在満日本人の受け入れ作業をしました。

入隊して来た方々に渡された剣は、鉄板を剣形に切り抜き、鞘や柄は割れ竹を合わせて針金でかしめただけのもので、銃はありませんでした。終戦直前のこの大召集は、頭数をそろえるだけで、当時の関東軍上層部の無策ぶりがうかがえます。終戦と同時に軍司令官が飛行機で内地へ逃げようとして、部下に阻止されたという事実が物語っております。

この直前、召集で来られた方々は、もし召集がなかったとすれば早く帰国できたであろうし、抑留されることはもちろんなく、亡くなられることもなかったであろうと思うと、全く気の毒の一語です。

現役兵であった私達としても、九九式短小銃、ゴボウ剣こそ現役兵としての体面が保てる正規のものでしたが、無線機は三号乙無線機のみで、これで旅団通信として仕事ができるのであろうか、と危惧を持ちました。

そして八月に入り、そろそろ編成も終わりかけたころ、ソ連機（一機だったという）の空襲を受けました。翌日になってハルビンの隣りの浜江駅や軍の貨物庫が襲われたということでした。その後私たちの旅団本部はハルビン神社（皇太神宮の分社）隣りの日満会館へ移り、無線隊は地下室へ、宿舎は徒歩約十分の満軍第五管区司令部近くでした。

八月十五日、重大放送があるという情報により、無線機をラジオに切り替えたのですが、雑音がひどく全然内容が分かりませんでしたが、隣りのハルビン神社へ日本婦人が三々五々泣きながらお参りしているのを見聞し、初めて敗戦を知りました。そのころ満人の家々は、昨日まで日の丸の旗を掲げていたのに、青天白日旗がとって代わり、中国の人々の転身の早さは、変遷中国の歴史から生まれたものであろうかと……。

そのころ、宿舎近くの満軍第五管区司令部で暴動があり、満人の司令官が殺害され、先遣隊として来ていたソ連軍の指示により、いまだ武装していた日本軍が鎮圧。そのころ私の部隊宿舎二階では、中隊長の森田中尉が拳銃自殺されたり、この宿舎を頼って集まった日本婦人は黒髪をバッサリ、男装するなど、終戦とともに、それぞれが身の振り方を決断せざるを得ませんでした。私自身は、上官の指示により無線機を地中に埋めたり、司令部の書類を焼却したり、ハルビン競馬場への武器集積の使役に従事したりしました。

当時、各地から在満日本人がハルビンに集結し、また軍隊も十万という大きな部隊が集まり、日本人に対し「いまだ武装している日本軍が治安維持しているから安心するように」との布告があったのですが、そのころ軍人の将官、また高級文官は誰よりも早く飛行機でソ連領へ連行されました。この時、私の部隊の旅団長の宇部少将も連行されたのです。終戦から十日か半月くらいのころで、当時ハルビンではこのことが話題となり、軍隊、官僚の指揮系統を乱す作戦だったのです。

帰国後知ったことですが、終戦前、松山の検事正として在任され、私もお仕えした石井謹爾という方は、松山から満州国最高検察庁次長として赴任されており、この最初の連行組に入れられ、その後、反動戦犯として刑を受けられ、彼の地で亡くなられたということで、ご不幸は哀しい限りです。

いよいよソ連領へ

先述の戦友菊池さんらへのご返事のとおり、ダモイだという甘言で貨車に詰め込まれ、着いたところはコ

ムソモリスク周辺の収容所（ラーゲル）でした。ここにはドイツの抑留者が二百人くらいおり、一週間ぐらい同居、ドイツ語のわかる軍医との会話で、日本人もつらいだろうが、十年もすればドイツと日本は再び手を握り、もう一度立ち上がってソ連を倒そうではないか、と言っており、ゲルマン民族の気概を感じ、生きなければという気持ちを強く持ちました。

ここへ来るまで各駅停車の都度、構内には満州からの略奪品の糧秣、被服類、工作機械、机、椅子に至るまで、山のように積み上げてあったのには驚きました。その後、たまに支給された玄米の俵には、昭和五年産の赤札がついたものがありました。

一番最初に覚えた「止まれ（ストイ）」

牡丹江の手前の海林（ハイリン）収容所（旧日本軍の弾薬集積所）での出来事です。そのころ各人は、毛布、外套、私物などかなりの物を持っており、夕方これらの装具を持って所内を歩いていたところ、警戒兵（カンボーイ）が「止まれ（ストイ）」と言ったのにそのまま歩いていたところ、いきなり発砲されて即死したことがあり、このようなことが二度とないよう布告されましたが、一番最初に覚えたストイであったのです。

満州紙幣など

これも海林でのこと。そのころ、私たちは満州紙幣を持っており、金網越しに満人が饅頭や卵を売りに来て、私たちは満州紙幣で買い物ができました。驚いたことに、この満人に交じって、終戦の時ハルビンの同じ部隊にいた関特演で召集の兵長がおりました。どこで私たちと別れたのか分かりませんが、金網の外側にいるということは一般人で、痩せて人相も変わっていたので、私は「兵長殿、ここへ帰りませんか」と誘ったのですが、彼は「ウン」と言ったきり立ち去ってしまいました。この方と私にはハルビンでちょっとしたことがあったのです。それは、終戦を知ったとき私が「兵長殿、よかったですネ」と言ったところ「貴様、何を言うか」と言って、いきなりビンタをとられた経緯があり、彼はこのことを思い出し、私の呼びかけに

応じられなかったのではないかと思います。彼のその後の消息は全然わかりません。

カエルのスープ

海林収容所は小丘陵の旧弾薬庫。水のことについては考えなかったのか、かなりの人員が集まると当然水不足となり、水溜りの水を争って汲んだものです。夜明け前なればきれいなうわ水にありつけると思った私は、早朝の水溜りから飯盒二つに汲み、手さぐりで味噌汁を作り、いざ朝食をと蓋をとったところカエルがのびており、そっとつまみ出し、せっかくの汁を捨てることもなく食べました。

最初の逃亡者

最初のラーゲルで、ノモンハン戦のとき大召集された、いわゆる関特演の古参兵二人が逃亡をはかり、数日後射殺され、私たちの目の前でジープから凍った死体を足蹴りして落とし、逃げるとこのざまだと言って見せしめられました。大隊長高島少佐は「今日の恥辱を忘れず、将来この恨みを晴らさなければ……」と、泣きながら訓示されました。

この逃亡した二人は馬の当番兵で、糧秣のエン麦を差しくってため、逃亡用の食料としていたもので、この位置がシベリアのどこあたりか定かでなかったのに無謀な行動でしたが、一日でも早く帰りたいという気持ちはよく分かり、この友の墓穴を掘ったとき、何とも言えない悲しさが湧きました。

伝染病

そのころ、ここから四キロくらい離れたラーゲルで発疹チフスが蔓延し、大隊の半数が死亡するという悲しいこともありました。

入ソ当時は、どこのラーゲルでもかなりの感染者があり、犠牲者も相当出た様子で、当時は死亡者の確認など全くでたらめであり、それを掌握する責任者とてなく、このようなことが今に至るまで消息不明者として残っている多数の方々だと私は思っています。

校倉式様のラーゲル建築

私たちより後から来る戦友のため、テント張りのラーゲルを減らして木造とする作業をしました。手ごろな木を伐採してそれを重ね、間に目つぶしの水ゴケを入れ、組み立てが終わって石灰で塗装して完成というものです。

食糧受領

ソ連の作業監督（ほとんどが受刑者）の引率でコムソモリスクまで食糧受領に行ったことがありました。この使役は誰もが望んでいたものです。作業は休めるし、受領した食糧は自由に食べられるからです。この食糧はラーゲルの者だけでなく、周囲に住んでいるロシア人（当時はほとんど流刑者とその家族）と警戒兵など全部の物で、往路は一般ロシア人と一緒の客車、復路は食糧を積み込んだ貨車で、受領を終わると同行監督は私を貨車に閉じ込めて施錠、どこかへ二日くらい遊びに行きました。その間、私は車内のパン、ラード、砂糖など食べ放題でしたが、目の前に何でもあるとそんなに食べられるものではありません。用を足すときとか自炊のときは構内の警戒兵に声をかけて開けてもらっていました。

見たり聞いたり体験したり（順不同）

当時のソ連兵は算数に弱く、五十で兵隊、百で下士官、将校はそれより少し多かったか、ほとんどの者が掛け算ができず、人員点呼で長い時間、寒いところに立たされたのには困りました。日本の小学生以下だったと思います。聞くところによると、満州へ最初に進入して来た兵の大部分は、減刑されて仮出所した囚人部隊であったとか。

白樺の皮は灯火として最適で、当所のラーゲルは電灯がなかったので、白樺の皮を灯火の代わりに燃やしたが、明るく、よく燃えました。ところが、翌朝は油煙で鼻の穴は真っ黒でした。

木材伐採でリューベを誤魔化した。一週間くらい前に伐採して積んでいた木材を、場所を替えて積み替え、今日の作業だと申告。監督は納得したが、翌日か

らの作業の切り口に炭で×印を一本ずつ付け、積み替えを防止した。監督も囚人、私たちに同情してか、何も言わなかった。

ソ連人は生大豆をおいしそうにポリポリ食べており、聞いたところ、油気があり大変おいしい（オーチンハラショ）。

中立国スイスを経由して内地の家族へ便りを、と言って渡された往復ハガキ、昭和二十二年七月ころでした。漢字は駄目、仮名のみで書けということでした。同年十二月に帰国すると確かに着いていましたが、この返事は受け取らず帰りました。

ウラジオストックの十日間

昭和二十年十月末、帰国のためナホトカの第一分所へ到着したのですが、三日くらい経ってから「お前たちを迎える船が来ないからまた移動だ」と言って船に乗せられ、どこへ行くのだろうかと思っていたところ、二日後に、軍艦などがたくさんつながれている港。そこはウラジオストック港でした。説明では、十一月七日の革命記念日に備えて市内の清掃作業をする、ということでした。赤レンガ造りの建物が並んだレーニン通りなどの側溝掃除など比較的軽作業で、一般人の浴場での入浴、映画館へも連れて行ってくれたりしました。あまりにも待遇がよいので、また逆送されるのではと心配したのですが、この作業が終わって汽車でナホトカの第三分所へ。ここまで来れば次はダモイだと喜びました。

昭和二十二年十一月、ナホトカに集結。十二月、高砂丸により舞鶴に上陸、復員。翌二十三年一月三十一日、松山地方検察庁へ検察事務官として復職。同五十九年四月一日、定年を二年残して依願退職。同六十年から司法書士として今日に至っております。そして、その傍ら平成元年から民生・児童委員となり、現在、松山市民生・児童委員協議会（市内三十二地区）の身体障害者福祉部会の会長（一期三年で二期目）として務めております。

以上、思い出すまま綴りましたが、まだまだ書き足りない気持ちです。しかし、このように活字にしてみると、労役、寒さ、食事のことなど、死ぬほどつらかったことよりも、転々とした各ラーゲルでの日々の生活の中で、生きて帰りたい、帰らなければ、との思いが強く、余分なことは考えず、私なりに案外リラックスの日々であったと思います。私をそのような気持ちにさせたのは、何といっても同じ境遇の戦友が周囲にたくさんおり、お互いが元気で帰りたい、帰ろうと激励し合っていたからです。他のラーゲルでは、余分な食糧にありつけるため、または労役を免れようと、ソ連の政治部員的な行動等で戦友を売る行為をした者があったと聞きますが、私の場合、各ラーゲルごとに、まず平穏であったことが何よりの救いでした。虜囚記、抑留記などたくさんの手記が出ておりますが、どこのラーゲルも申し合わせたように、全く同じような作業や境遇であったのには驚きで、このことは、ソ連側から各ラーゲルとも同様の指示がなされていたものと思います。

終戦後五十有余年、戦争を知らない世代も多くなり、このような手記も色あせる現代ではありますが、せめてかかわりのある者のみでも、再認識、再確認していただければ……。

最後に、再び、彼の地で永い眠りについている多くの戦友のご冥福を祈りながら、終わります。

【執筆者の紹介】

金枡さんは大正十四年七月二十七日、愛媛県北宇和郡で生まれ、宇和島市で少年時代を過ごし、県立宇和島中学を卒業。すぐ松山地方裁判所の検事局へ奉職され、昭和二十年二月まで丸二年働き、博多集合。渡満は昭和二十年三月三日でした。

牡丹江、ハルビンなど移駐を続けるうちに終戦。抑留の身となりましたが、コムソモリスク周辺の収容所を転々としたため、ラーゲルの番号などは記憶していないそうです。幸いにして割合早く復員でき、健康な体で、昭和二十三年一月、松山検察庁へ復職することができて、三十六年間奉職。退職後は司法・行政書士

の本業と、ボランティアで民生委員、児童委員。
松山市民生・児童委員協議会の身体障害者福祉部会の会長さんを二期目のお務めをしておられます。趣味とかは別に大してございませんようですが、せっかくシベリアから生きて帰った命を大切にし、民生事業に心を捧げたい信念で生きておられます。息子さん二人もそれぞれ独立され、奥様と二人で社会のために静かに尽くしてゆくつもりだと承っております。
また、全国強制抑留者協会愛媛支部のためにいつも御協力を賜っていることにお礼申し上げます。

（愛媛県　山本　繁夫）

シベリア抑留記

愛媛県　長谷川　三　郎

大正十二（一九二三）年四月二十一日、愛媛県喜多郡長浜町で出生。昭和十三（一九三八）年三月、喜多尋常高等小学校高等科卒業。四月、西宮市、甲陽消費組合に就職。支那事変による物資不足等により将来に不安を感じて二年後に退職。昭和十五年三月、満州国新京（長春）市、東京無線に再就職しました。
昭和十九年八月一日、満州国間島省間島、満州第一六六一四部隊に現役兵として入隊しました。一期の検閲後、佳木斯の野戦航空修理所の教育隊に移動し、一式戦闘機整備の教育を受けた後、昭和二十年二月に敦化の第五航空軍二〇〇飛行場大隊に転属しました。
その後三回の移動で、昭和二十年五月、北朝鮮温井里飛行場に移動。ここでは、ソ連との開戦に備え特攻機の燃料と爆弾の補給が主な任務でした。八月九日ソ連が参戦し、北朝鮮日本海側より侵攻の報道が刻々と伝わってきました。補給中隊には小銃はなく、ソ連軍の自動小銃に対して帯剣だけで応戦するしかなく、どう考えても勝てない戦いが目前に迫ってきました。明日はどうなるか分からない事態の中で、期待していた特攻機は燃料の補給には一向に来ず、絶望感が増す中で八月十五日を迎えました。
八月十五日朝「重大放送」があるとのことで、将校